
榎戸正勝誕生日記念SS

遊び人レベル世界3位

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

榎戸正勝誕生日記念SS

【Nコード】

N7395Y

【作者名】

遊び人レベル世界3位

【あらすじ】

日向翔太郎が好きだったが、その恋は実らなかった皆村愛理。彼女が好きな榎戸正勝。ゲーム本編では語られなかったこの二人の恋を遊び人が妄想を駆使してお送りします！

なお、この小説は私のブログ、mixi、pixiv、GREE、M・G・Stationの各サイトにも公開してあります。

・
・
・

「やあ、こんばんは。

今宵も月が・・・と言わされそうだったけど、

あの人が流石に3回連続で同じ文句は芸がないと思ったらしく、

今回は言わされずにすんだ天作知之だよ。

さて、今日はWith Ribbonの登場キャラクターの一人、

榎戸正勝の誕生日のようだね。

というわけで例によってSSをあの人は書いたみたいだよ。

しかし主人公の時もそう思ったけど、

男性キャラクターの誕生日にもSSを書くとはあの人よほど暇なんだね。

まあそれはともかく、今回もSSをじっくりお楽しみ下さい」「

キンコーンカーンコーン

今日の最後の授業を終えるチャイムが鳴り響く。

「終わった〜！」

それと同時に陽奈ちゃんが活気づく。

最近は随分とがんばるようになってきたのだが、

それでもまだまだ勉強は苦手のようにだ。

彼女、穂坂陽奈ちゃんは俺の幼馴染の一人だ。

美少女で明るいのだが、

かなりずばらで翔太郎がついていてやらないと何もできない女の子。

又勉強もお世辞にも良いとは言えなかった。

彼女が俺達と同じ刻泉学園に通っているのはちょっとした奇跡でもある。

彼女が男だったらまさにギャルゲーの定番、

ずばらな主人公をしつかり者の幼馴染が面倒を見る、

というパターンが成立するのだが、

まあ現実とゲームで違うのはあたりまえか。

そんな彼女に変化が訪れた。

その変化はもう一人の幼馴染である日向翔太郎の親戚のはるかちゃんが入ってきた頃から始めた。

当番でもないのに学園祭の前日の作業を最後まで翔太郎と残って作業してくれたのだ。

学園祭当日もしっかりその容姿を生かし、メイドとして働いてくれた。

そのおかげもあって学園祭のうちのクラスのメイド喫茶は大好評。

その後彼女が翔太郎と付き合い合う事を正式に知った俺達。

まあ学園祭が始まる前からそんな雰囲気は出していたから感づいてはいたのだけど。

俺としてはあいつらにはくつついてもらいたかったから素直に嬉しかった。

「それじゃあさっさと掃除しまおう」

「うん！」

翔太郎が声を掛けると陽奈ちゃんも元気に返事をする。

恋人ができると人は変わると言われているが、

あの陽奈ちゃんがここまで変わるとは思っていなかったな。

「ちょっと、何サボってるの」

いきなり声が掛けられて振り向くとそこには・・・

学級委員長がいた。

陽奈ちゃんに勝るとも劣らない容姿の彼女。

名前を皆村愛理という。

帰国子女で英語はペラペラ。

しっかり者だけど堅物というわけではなく、

男女共に人気のある美少女だ。

「わりい、わりい、ついあの二人が微笑ましくてさ。

あの面倒くさがりだった陽奈ちゃんが、

翔太郎を自分から手伝うのが当たり前になる日が来るとは思っていない、

つつい愛のパワーというのに感心してしまってたところなんだ」

そう言った後俺はしまった、と心の中で悪態をつく。

「そう・・・」

彼女は一瞬少し寂しそうな目で彼らを見ると短く答えた。

彼女は翔太郎の事が好きだったのだ。

彼女もあの時俺と同様に、

陽奈ちゃんが付き合うことになったことを直感で感じたのだろう。

彼女は自分の気持ちを犠牲にしてわざわざ休憩時間を合わせてあげたのだ。

俺と一緒に回りましょって誘わないでいいのかと聞くと、

彼女はもう終わっちゃったんだしと答えた。

あれから数ヶ月。

はるかちゃんは夏休みが終わると自分の住んでいた国に帰ってしまったらしい。

二学期が始まった時に担任の美奈子先生から聞いた時には急だったので驚いたけど、

今でははるかちゃんが来る前の教室の空気になっていた。

一部の人間を除いて。

どうやら彼女にはまだ未練があるみたいだ。

普段は気丈に振舞っているが、やはり失恋というのは辛いらしい。

そんな無理に気を張っている、彼女を見るのは辛い。

だが俺には、その失恋を乗り越えて欲しい、という思いもあった。

彼女ならいつかできる、俺はそう信じている。

俺の言葉を聞き、一瞬悲しい表情を浮かべた彼女だったが、

すぐにいつも通りの表情に切り替わる。

「て、ちょっと、そんなこと言っただけで掃除をサボろうとしても許さないんだからね！」

空元気だとわかりつつも俺はそれに合わせる。

「へいへい。」

じゃあ俺も掃除しますよ」

俺は机を運び始めた。

掃除もほぼ終わり、

後はゴミ捨てだけになった。

委員長がゴミ袋を2つ持っていて1つとしている。

俺はそんな彼女に声を掛けた。

「おいおい、委員長、

委員長がそんなの持っていくことないって

「でも誰かがやらないと・・・」

「じゃあ俺が持っていくよ。」

委員長には他の仕事あるだろ？」

「・・・いいの、ちょっと教室から離れたかったから・・・」

「・・・わかった。」

でもいっぺんに二つは無理だろ。

一つだけ持つから一緒に捨てに行こうぜ」

「・・・ありがとう・・・」

俺達はゴミ袋を持って焼却炉に向かった。

「さっきは悪かったな・・・」

「何の事？」

焼却炉からの帰り道。

俺はさっきの事を謝った。

彼女が無理に強がっているのがわかり俺の気持ちは痛む。

「なあ、委員長……」

俺が続けようとする委員長はため息をつく。

「はぁ……私駄目ね。」

もう諦めたと思っていたのにまだ未練が残ってる。

本当は二人の友人として祝福してあげなくちゃいけないのに……」

彼女の話俺は黙って聞く。

「最近授業も集中できなくてね……」

このままじゃいけないって思って集中しようとするんだけど、

やっぱり気になっちゃって……

どうしたらいいんだろうね」

彼女は自嘲ぎみに笑みを浮かべる。

「ああ、もうあたし最低っ。

榎戸君もごめんね。

わざわざ付き合ってくれたのに愚痴なんか聞かせちゃって」

「……いよいよ……」

俺は声を落として真剣に言う。

「俺なんかでよければいつでも愚痴くらい聞くんよ」

俺は立ち止まって委員長を見る。

委員長はキョトンとした顔で俺を見つめる。

「榎戸……君……?」

「それで委員長の気が少しでも紛れるなら……」

俺はいつになく真剣に言った。

すると委員長は……

「ありがとう」

笑ってくれた。

(あ……)

その笑顔は俺の見たかった笑顔だった。

・

・

・

数日が経った。

委員長はあれ以来、

翔太郎達をつらそうに見る事はなくなっていた。

俺はとりあえず一安心した。

ホームルームが終わると、

クラスメイト達に挨拶をして俺は足早に教室を出る。

俺は先月からバイトを始めていた。

そして今日はそのバイトの日。

俺は勤務先に向かった。

その勤務先とは・・・

「おかえりなさいませ、お嬢様」

俺は執事喫茶で働いていた。

ここのバイトを選んだ理由は、

もちろん自給。

俺の趣味は金がかかる。

ゲームにグッツ、そして様々なイベント。

それらにかかるお金を捻出するには、

自給のいいバイトが必須なのだ。

仮にも執事がそういった理由で働くのはどうかとも少し思ったが、

メイド喫茶のメイドさんだって、

自分の趣味の為に働いているんだろう、

と思いつくことにしてこのバイトを始めたのだ。

それに似た理由でバイトしている先輩も結構いたし、

俺もすぐにその中に溶け込むことができた。

だけど今の俺が欲しいのはそういった物に使うお金ではない。

俺は先日ある事を決心していた。

それは・・・

“彼女に告白する”

ということだった。

ただ告白するだけならお金はいらないのかもしれない。

だが告白などしたことない俺は、

ギャルゲーの告白シーンを想像していた。

好きな子と外に出て、

一日過ごして、最後夕日が傾く頃に告白する。

そんなシチュエーションを想像していた。

しかし、一日過ごすにはお金がいる。

なら仕事を頑張ればいい。

実際はデートに誘うこともできるかわからないのだが、

俺はそんな妄想をしながら仕事に取り組んでいた。

だからなのかもしれない。

俺はある可能性を完全に見落としていた。

カラン〜コロン〜

しばらく接客をしていると、新しいお客様が入ってきた。

入り口の近くにいた俺が対応に入る。

「おかえりなさいませ、お嬢様」

マニュアル通りの出迎えをする俺。

一礼して顔を上げるとそこには・・・

「え、榎戸・・・君・・・？」

委員長がいた。

翌日の休み時間。

俺は委員長と話していた。

「まさか榎戸君があんなところで働いているなんて思わなかったわ」

委員長は呆れている。

「でもある意味納得ね。」

榎戸君、顔だけ見ればイケメンだし？

あの仕事をしていれば女の子と出会い放題だしね？」

俺は自給がいいからバイトを始めたのに、

委員長は女の子との出会い目的の為にバイトしていると思ったようだ。

俺は誤解だという事を説明するが委員長は聞く耳を持たない。

「はいはい。

まああの店で可愛い子でも見つけてせいぜい幸せな日々を送って頂戴」

皮肉をこめたその言葉に俺は頭に血が昇った。

ドンッ！

俺は机を叩く。

クラスメイト達は何事かと俺達を見る。

目の前の委員長は目を丸くして固まっていた。

俺はそんな委員長を睨みつけながら言う。

「俺が好きな人は一人だけだ。

変な言いがかりはやめてくれ」

言い終わったところでチャイムが鳴って先生が入ってきたので、みんな各々の席に着く。

そして何事もなく授業が始まった。

昼休み。

俺は屋上に来ていた。

前の休み時間にあんな事をしてしまったので、

教室には居辛かったからだ。

すっかり俺の熱も引いてさっきの行動は軽率だったと反省する。

物に当たってしまったこともさることながら、

好きな人にあんな態度をとってしまった事を後悔していた。

「はあ」

俺はため息をつく。

壁に寄りかかっていると人影が落ちた。

委員長だった。

「さつきは、ごめんなさい……」

委員長が隣に座って謝ってくる。

「榎戸君があんなに怒るなんて思わなかった。

誰だって誤解で遊び人のレッテル貼られたら怒るわよね。

それに好きな人に聞かれて誤解されるかもしれないし……

私そんな事にも気が付かなくてあんな酷いこと言って……

自分の言動がいかに愚かなことだったか、

冷静になって考えてみてやっとわかったわ。

本当にごめんなさい。

言い訳にしかないけど……

陽奈と翔太郎君が付き合って、

榎戸君まで誰かと付き合って、

私、独りで取り残されるのが怖かったの……

でもだからって他の人の恋を邪魔する権利なんてあるわけない。

許して、とは言わないわ。

でも私にできるのはこうして謝ることと、

榎戸君の恋がうまくいくように応援することぐらい。

あんな事言った後だから信用してもらえないだろうけど、

私、榎戸君の恋がうまくいくよう全力を尽くすわ。

だから、何でも相談して。

もうあんな態度、二度ととらないと誓うわ」

彼女はそう言うと言つ直ぐに俺を見つめる。

その瞳は真剣そのものだった。

「ふう」

俺は彼女を少し見返した後ため息をついた。

そして俺は言葉を続ける。

「ありがとう委員長。」

委員長の気持ちはよくわかった。

俺もあんなことをしちまって、

さつきまで後悔していたところさ。

誤解されやすいバイトをしていたのは確かだから、

俺にも非はあるし。

でも委員長に信じてもらえないことが何より悲しかった。

だから俺もあんなことしちゃったんだ」

委員長は変わらず俺の話を聞いてくれている。

そして俺は覚悟を決めたのだった。

「正直他の人ならどう思われてもよかった。

でも委員長、君だけは違う。

それは皆村愛理、俺が好きな人は君だからだ」

言ってしまった。

もう後戻りはできない。

俺は彼女の返答を待つ。

「榎戸君が・・・好きな人が・・・私・・・？」

彼女は予想外の展開に思考がついていけないようだ。

「え……ウソ……ホントに……？」

彼女の顔がみるみる赤くなっていく。

そんな表情もかわいいと思ってしまう俺は末期なんだろう。

そんな自分自身に心の中で苦笑しながらも俺は彼女が落ち着くのを待つ。

彼女がやっと落ち着きを取り戻し、

「ホンキ……なの……？」

と聞いてきてから俺は彼女に好きになつた経緯を話す。

「この学園に入学して、

最初に君を見た時、

かわいい子だなと思った。

だけどその時はそれ以上の感情は無かった。

でも同じクラスになって、

日本の学校は久しぶりなのに、

学級委員長を任されて、

慣れないはずの仕事をすっかりこなしている君を見ているうちに、

君にどんどん惹かれていった。

そして気が付いたら好きになっていた。

そんな君が翔太郎に恋をしていると知った時、

最初は嫉妬した。

でももう一つの感情がそれをすぐにかき消した。

君には幸せになって欲しいと。

それと同時に俺は初恋を諦めた。

諦めたはずだった。

でも想いを遂げられずに失恋してしまった、

傷ついている君を俺は見えていられなかった。

まるで初恋を諦めた自分を見ているみたいだった。

だから俺はあの君の笑顔を見た日に決心したんだ。

俺は君がしなかったことをしよう。

君と同じ後悔はしないようにしよう」と

「・・・」

「本当はデートに誘って告白するつもりだった。
だから仕事も頑張った。

まさかこんな事になるとは思ってもいなかったけどね。

予定違いもいいところだよ。

でも俺の気持ちを伝えるには、

俺が好きな人は君だけだって伝えた後の今しかないと思った。

君が謝っている時にこんな事言うのは卑怯だとは思っ。

でもどうしてもこの気持ちだけは伝えたかった」

俺は自分の想いを伝えた。

弱みにつけこむような形になってしまったけど、

このまま好きな人の事を言えずにいるよりましだと思った。

現実とフィクションはこんなにも違うんだなと改めて思っ。

予定通り事が運ぶなんてフィクションの世界だけだ。

現実ではありえない。

でもこんな状況でも俺は好きな人に想いを伝えられてよかったと思

っている。

話をしている間に断られる覚悟もできた。

俺は彼女の返答を再び待つ。

「ふう」

彼女はため息をついた。

やっぱりダメだったか。

俺がそう思った時・・・

「ありがとう」

彼女は俺に礼を言った。

「今まで私をこんなにも想っていてくれて

私、本当周りが見えてなかったようね。

こんなにも自分を想ってくれている人がいるって、

告白されるまで知らなかった。

自分の事ばかり考えて・・・

無神経な愚痴を聞かせたりして・・・

辛かったでしょう？

でもそんな私に真剣に告白してくれて・・・

本当にありがとう。

でも、本当にいいの？

こんな私で・・・」

「ああ。

俺が幸せにしてみせる。

それは君しか考えられない」

「榎戸君！」

俺がそう言つと彼女は抱きついてきた。

そんな彼女を俺は抱きしめ返す。

「今までごめんなさい・・・

そしてありがとう・・・」

こうして俺は想いを遂げられた。

けどここはスタートライン。

これかもいろいろあるだろう。

だけど俺は乗り越えられると信じている。

最愛の彼女と共に・・・

F i n

サークル内でホモ疑惑が立っている遊び人レベル世界3位です、皆様こんにちは。

「ああ、そういう事。

むしろこっちが本命なわけね」

んなわけねえだろ！

「んで正勝と翔太郎どっちが好きなの？」

だから違っつて！

「じゃあ前ナレでも言ったけどなんで男性キャラクターの誕生日までSS書いてるのさ」

それは俺が愛しているからだ！

「なるほど、正勝が本命なんだね。

という事は翔太郎が愛人か。

ああ、でも昔天神乱漫の蘇芳と虎太郎と春樹の話も書いてたよね。

嫁さんが多いと大変だ」

もういいわ。

そう思いたければそう思っていればいいさ。

未来永劫、俺の嫁は海老原みなせ唯一人だから。

「あゝあ拗ねちゃった。

まあイジるのはこれくらいにしておくか。

それで本当の理由は何なの？」

さっきの答えは言葉が足りなかったな。

俺はこのWith Ribbonという作品事態を愛しているんだ。

だからそこに登場するキャラクターのSSはできる限り作りたい。

それが男性キャラクターであつてもね。

むしろ男性キャラクターだと俺はあまり男性キャラクター視点でSSを書かないから、

いいガス抜きになるんだよ。

「なるほどね。」

まあとにかく今回もいつもどおり反省からしていこうか」

今回の反省点というか不安なところは、

さっきも言ったけど俺って男性視点の話って書かないから、

うまくまとまっているかなってところかな。

反省点としてあげるなら、

話全体がまとまっているかわからないって事。

いつもみたいに具体的に書けないところだね。

「前にも1、2回そんなことあったよね」

そうだねえ。

まあ実際あまり書かないタイプの文章は全体的に不安って事だね。

「なるほどね。」

じゃあ次は背景。

さっき大きな理由は聞いたけどね、この話にした理由でも話してよ」

まあこの二人の話はやっぱり書きたかったからというのが最大の理由かな。

本編の後、こんな風になってたらいいなって気持ちで書いてた。

ちなみに正勝の時はこの話を書こうってかなり前から決めてたんだ。

「まあ正勝が愛理を好きって設定だしね」

そっという事。

さてそれじゃあそろそろ閉めようか。

「んじゃボクの次の登場は例によって来月かな？」

そうだな。

次の登場は多分クリスマスだな。

「久遠の誕生日だっけ？」

そそ。

今頑張ってるよ。

あ、後この作品のSS何で書いてるかも一つ理由があったわ。

もう告知してあるけど、冬コミでこのWith RibbonsのSSをまとめた本を発行するからだわ。

ちなみに1月、2月分も先行収録するよ。

「宣伝はそれくらいでいい?」

ああ。

「それじゃあ皆さん、また来月」

ここまで読んでくださってる方、ありがとうございます。

With RibbonのSSは来年の2月まで続く予定です。

もう少しお付き合いいただけたらと思います。

それでは本日はこの辺で

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7395y/>

榎戸正勝誕生日記念SS

2011年11月22日02時56分発行